



墓あとの十歩に息足らぬ
 国見敏子
 落葉松の木末を揺らす小鳥来て
 古畑恒雄
 潰えざる夢胸中に真葛原
 岩井かりん
 グラウンド・ゼロに九月の水溜り
 矢島 恵
 二百十日や空箱に薄き闇
 宮坂やよい
 見えぬものいつも手探り流星群
 田村道子
 地下聖堂に父を眠らせ星月夜
 太田 薫
 天と地の隔たり極む九月尽
 太田継子
 草取れば心ほどよく空きにけり
 柁木幸子
 月光や磨る墨に息あるごとし
 谷口とし子
 石も人もぶつかり丸くなれる秋
 珠凧夕波
 手ばかりを洗うていつの間にか秋
 辰野利彦
 かまつかの夕日に負けぬ矜持かな
 野口美智子
 天の川夫と牛飼ふ五十年
 金井勝代
 鶏頭の並びて闇の深きかな
 白井小夜子

*

戦争の已め方蘭の育て方
 田中優子
 秋の雷人はおのれの死に会へず
 穂苺真泉
 玉葱の剥かれゆく時あゝ本音
 山田寿子
 冬瓜を食べきまりつくごと五体
 森 千恵子
 君らスマホの僕よ窓外は秋
 北村宣枝
 熱帯夜ひとの心は不発弾
 柿谷有史
 新涼が鏡の中に横たはる
 高橋節子
 けらつつき子の苛苛の伝はり来
 菅原砂登子
 秋風や笹舟に皆ついでいく
 高松正明
 姥百合の葉のなき花や母の魂
 寺地和子
 *
 コスモスや散らかつてる塵溜め場
 二木 暖
 手を抜いて誉められてをり鰻の日
 岡田三矢子
 風入るる越後毒消縁起考
 島田謙吉
 カンナ燃ゆ友好繋ぐ河北省
 太田 滋
 冬ざれや母達のくる読み聞かせ
 永田良子

岳俳句の現在 十一月 ⑤19

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。巧い句を見続けていると、下手な句が恋しくなる。巧い句とは端的にいうと象徴句である。形ある見えるものの背後に何かを託した重厚な句である。下手な句は見えるものを一生懸命に描こうとしている。こつこつとした句である。なにか句に託して思いを言おうとしない句である。見えるものを描こうと苦心している句である。見えないものを描こうと努力した往年の日から、せめて見える形あるものを捉えたいと、私の中で晩年の足掻きが始まったのかもしれない。

着眼の場により句が引き立つ グラウンド・ゼロの景

グラウンド・ゼロに九月の水溜り 矢島 惠

「グラウンド・ゼロ」は核実験などの爆心地の意。そこだけのことであるが、眼のつけどころがいい。世紀の事件九・一一のニューヨークのマンハッタン。世界経済の拠点は今でも世界中の関心が集中する場には違いない。かつてのセンタービルの跡地には九・一一に関する博物館が建ち、二七五二人の犠牲者を追悼するメモリアルがある。作者はそこで「九月の水溜り」を見つけた。八月が過ぎ、九月。そっけない九月が生きている。見えたものを見えたように捉えたのである。

藁あとの十歩に息足らぬ 国見 敏子

ことばは優越感の産物である。鑑賞にはそれが伴う。同情も激励もできない時に何をすればいいのか。あと十歩が今日のノルマ、目標であったか。生存と向き合っている作者。

落葉松の木末を揺らす小鳥来て 古畑 恒雄

平常心に飛び込んできた風景である。金色の落葉松、戯れる小鳥。秋はささやかな喜びを齎す。いまの眼前の風景が私の生存。日比谷公園の落葉松、軽井沢の落葉松、わが家周辺の落葉松。風景が愛しい。小鳥が愛しい。このような「心」を持つことができることに人生の崇高さを感じている。

潰えざる夢胸中に真葛原 岩井かりん

叶えたい夢を持つ。深秋の真葛原に佇み、若き日以来の夢が金平糖の角のように好奇心を掻きたてることに自分自身が感動している。やり遂げた充実感がなければ夢も形を成さない。意欲的な生き方ではないか。

二百十日や空箱に薄き闇 宮坂やよい

見逃してしまう日常のさりげない感動を掬い上げる名手である。手ごたえがあるドラマチックな感動ではない。台風来

襲の時期、段ボールの空箱に籠った薄い影。素麺の束を出した空箱には素麺の名残のような影が生きている。ナイーブだ。

見えぬものいつも手探り流星群 田村 道子

宇宙の星空の見えぬもの。ときに人間の生死も意外にそんな宇宙のブラックホールと関わるのかもしれない。

地下聖堂に父を眠らせ星月夜 太田 薫

ウクライナにて戦没した父であろうか。第三人称が主人公のように読めるが、父への思いが明快に描かれている。人生には運不運がついて回るが、父母の供養を懇ろにすることで、私の精神的な足場がしっかりする。

天と地の隔たり極む九月尽 太田 継子

雄大な句である。古来「九月尽」は秋の終わり。大きな季節の節目にあたる。天は天の究極に、地は地の究極に。秋の

今月の秀句

手ばかりを洗っていつの間にか秋 辰野 利彦

コロナ禍の間、検温と手の消毒を至る所で実施。当たり前になって、気がつけば秋。今年は実りの秋に何が残されるのか。コロナ禍前とコロナ禍以後を繋ぐ身体の主役が白い手。不思議な年である。啄木のようにじっと「手」を見つめる。

国見 敏子

古畑 恒雄

岩井かりん

宮坂やよい

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

岩井かりん

他に同人集から推薦候補作をあげる。

新涼や若さ疑はざりし日々 堤 保徳
霧を脱け霧へ沈める観覧車 幹 自聲
百日紅ひと日ひと日をまつくら 田中 利政

スマホが句になるか―窓の外をこぼす。もう秋。

君らスマホの僕よ窓外は秋 北村 宣枝

やさしく諭すスマホ批判。これくらいモラルが現代俳句の自由さを感じさせる。若者よ、スマホの下僕、スマホに使われているようね、たまには窓の外を見てご覧、季節は秋よ。こんな呼びかけのような句で面白い。

秋の雷人はおのれの死に会へず 穂苅 真泉
定めである。お芝居とは異なり、死にゆく自分を感じながら

今月の秀句

戦争の已め方蘭の育て方 田中 優子
迂遠な句であるが、一旦始めた戦争をやめるのは、蘭の育て方の難しさと同じくらい難しい。戦争対平和の対比を暗示しながら、比較にならないものを比べた可笑しさ。戦争開始、戦争終結をからかったのである。考えた反戦の句。

にいる子の苛苛した気分がびりびり伝わる。秋は家族間でも気分がびんびん響く。

秋風や笹舟に皆ついていく 高松 正明
子どもたちの笹舟流し。先生に子どもがみんな、笹舟の流れる野川沿いについて行く。秋風が吹くさみしさが気持をまとめるようだ。やさしさが生まれる。

姥百合の葉のなき花や母の魂 寺地 和子
心が青白くなるまで苦勞に耐えた母。日陰に咲く姥百合の花から母を連想した。「母の魂」の大胆な置き方に感心した。

青雲集

コスモスや散らかつてゐる塵溜め場 二木 暖

フランスのレンヌからの投句。今秋から西洋哲学研究のためパリへ留学した仙台出身の大学生。一読、パリの裏町が浮かぶ。塵捨て場ではなく、「塵溜め場」という表現に愛情がある。塵も考えている「存在」。あえていうとこれがフランス(西洋)。「こちやこちや」の中から新しい詩想が生まれる。期待、期待。

手を抜いて誉められてをり鰻の日 岡田三矢子
土用の鰻の日。なにもしないで食卓に鰻だけ。ほほうこれはこれは。家族が口を揃えて鰻大好き。「岳」登場そうそう軽々とヒット。「鰻の日」には川柳の味が加わる。

ら、それをことばにして話すことはできない。死とは自分が主人公であるが、死の真実を知ることが不可能である。時期外れの雷のように、理不尽なことばかり。

玉葱の剥かれゆく時あゝ本音 山田 寿子

玉葱を剥く。臭み辛みが眼に飛び込んで、きれいごとなどいえない。八つ当たり気味。途端に普段の暮らしの仮装、お芝居に気づいたのである。「あゝ本音」が面白い。

冬瓜を食べままりつくこと五体 森 千恵子

のっぺりした長楕円形の冬瓜、冬瓜。白味の淡白な果肉を食べ、脂っぽい気持がすっきりした。要は好き。頭も両手も両足も揃った感じ。人間らしさを感じたわけ。面白い秀句。

熱帯夜ひとの心は不発弾 柿谷 有史

真夏の夜の暑さには閉口だ。作者は大阪暮らし。眼がご不自由で、慣れているとはいえ、暑さに八つ当たりしたい気分。辛うじて耐えている気持を「不発弾」とは、俳句で救われている。

新涼が鏡の中に横たはる 高橋 節子

「戦争が廊下の奥に立っていた」(渡辺白泉)が意識にある。爽やかな秋の体感を客観視したかったもの。白い裸婦が鏡の中に仰臥しているような趣きだ。

けらつつき子の苛苛の伝はり来 菅原砂登子

木をこつこつ穿つ啄木鳥。その音に集中していると、身近

風入るる 越後毒消縁起考 島田 謙吉

さすがに生きてきた年季が入る。作者は九十歳。富山・越後の雪国は薬売りの本場。古書「越後毒消縁起考」の風入れ。

カナナ燃ゆ友好繋ぐ河北省 太田 滋

中国と友好姉妹都市関係を推進、模索する、もと小学校の校長先生。語学堪能で視野が広い。石家荘市が省都の黄河の北に位置する河北省と仲良しの学校。滋味のある句だ。

冬ざれや母達のくる読み聞かせ 永田 良子

九州直方市在任の熱心な作者が本誌に登場。母達との図書館読み聞かせ運動を進める。寒くなる中とはいえ、意欲がある。毎日がたのしみ。

他に岳集・青雲集から推薦句をあげる。

花茗荷黄泉路は仮面被らざり 小池 孝雄
露のせやいつかひとりで乗る列車 長島 環
銀の水掬ひ上げ惜命忌 矢島 栄子
節介の風吹かせたり秋の草 加藤 律子
秋の野は溜息よりも深呼吸 西澤日出樹
罰のごと果てもなく血溜ぐ夜業 三品 史紀
電柱の影さへも夏痩せにけり 長瀬 冬嵐
藪干すや一日日照る指の腹 市川 敬子
草の葉やおのおの露抱きたる 山崎 和之
大花野友も私も後生案 菊池理津子